

## 追悼文

## 阿部知博先生の思い出

総合診療科

村井 啓子

平成30年5月1日、日赤病院の休日である創立記念日の午後、緩和ケア病棟の畠山元先生と出会いました。その時「今日の朝、阿部知博先生がお亡くなりになりました」と知らされびっくりしました。私自身も、外傷で入院していた身体でもあり、阿部先生が当院の緩和ケア病棟に転院していたこともその時初めて知りました。

数ヶ月前に、阿部先生からお電話をもらい、妻の診察をしてもらえないだろうかと申し出があったばかりで、元気に療養しているものだとばかり思っていました。その時は、ご自分が病気になったので、奥さんの事も心配しているんだなあと思い、「本当に奥さんの事を愛しているのだな」と思いました。幸いにも奥様の方は色々検査して異常がないと分かり私自身もホッとしました。

阿部先生との思い出は色々あります。内科なので、常にCT検査やMRI検査を依頼することが多く、すぐに検査をしてほしいとかいろいろ無理なお願いをすることも多かったのですが、阿部先生はいつも沈着冷静で、ちょっとすこし首をかしげて、なんとか夕方までにMRIをとれるようにしますからと言って、必ず、嫌な顔一つせずに、いろいろ工面して検査をしてくれました。本当に頭が下がる思いでした。

また、夏休みが終わったある日、医局でしばらくぶりにお会いしたので、「先生、夏休みはまたどこか外国にでも行って来たんですか」と問いかけをしたら、嬉しそうに、「ウイーンにいつてきたんですよ」とおっしゃいました。「ああそうですね、先生は管弦楽に入っていましたものね」と私が言ったところ、「モーツァルトの生家にまで行って来たんで

すよ。バスで何時間のかかる片田舎で観光客もほとんど来ないところで1日ばかりでしたが、とてもよかったですよ」と本当に幸せそうな顔で話して頂きました。

阿部先生との仕事上の大きな思い出の一つは、「盛岡赤十字病院紀要」の継続的な刊行に随分と力を発揮して頂いた事です。「盛岡赤十字病院紀要」は、現在の都南地区に新築移転して、2～3年たった1992年頃ころ、日赤の名誉院長である沼里進先生（当時は泌尿器科部長）が「これからは、患者さんを単に診察して治療するだけではなく、学術的にも自分の仕事をした結果を記録として残す必要があります、そこから新しい発見がでてくるからと言って、自前の学術雑誌を作ろうじゃないか」と提案されて第一号を発刊しました。その後、毎年、締め切りをいつも過ぎてしまい、今年は発刊できないのではないかといつも冷や冷やしていました。阿部先生は、締切りが近づいてくる2～3か月前から、朝いつも医局会で、「原稿を早く出して下さい」と毎年のように医局員にお願いしていました。そのおかげで、なんとか症例報告や研究発表、CPCなどの原稿が集める事が出来たということです。また、雑記の中身や質についても、いろいろ提案して頂き、原稿の推敲についても何度も点検して印刷屋さんとのやり取りで時間がかかり発行が遅くなることがままあったので、あるときから、阿部先生の発案で「原稿をフロッピーディスクで提出してもらおう」ことになり、非常に添削も早くなり、誤植による校正もほとんどなくなり、短時間で初校ができ、コスト削減にもなり、印刷屋さんも相当楽になったようでし

た。

また、2006年ころ第15号からは、編集委員は医師だけでなく、広く各職種から選出してもらい、それまで医師だけで症例報告や研究発表を掲載していたのが、一挙に病院全体の雑誌と言うふうに格上げされました。後日、病院機能評価の時に、認定が1年見送られ、各診療科の業績などを求められた時に、それまでまとまったものがなかったため、この雑誌が非常に役に立って、病院機能評価を得られたという嬉しい逸話が残っています。事実、この時点では、保険診療による緩和ケア病棟建設予定でしたが、病院機能評価が得られなければ、緩和ケア病棟の保険診療が認められないという条件でしたので必死でした。そのように「日赤紀要」に尽力された阿部先生が「日赤紀要」によって病院機能評価が得られ、そしてその結果、建設が可能になった緩和ケア病棟で人生の最期のときを御家族とともに過ごされたことは非常に感慨深いものがあります。本当に今まで一緒に仕事が出来て感謝しています。

ふと、テレビを見ていたら私の好きなテノール歌手の秋川雅史さんの「千の風に乗って」の歌が流れてきて、ああ誰かに似ているなあとも思っていたら、なんと、おおらかな雰囲気や全体の優しい感じが阿部先生にそっくりだということに気がつきました。いつか冗談に「千の風に乗って」を歌ってと阿部先生に無理難題を言ってみようと思っていたのに、きっと阿部先生は、すこし首をかしげ、ちょっと困ったような微笑みをうかべながら、「また、村井先生そんな無理難題を言って」といいながら、「じゃあ、なにかの時に歌ってみましょうか」と冗談っぽく言ってくれたんじゃないかと思うのです。また、臨床研修の委員をしていた時、「息子さんは臨床研修どこの病院で研修する予定なんですか」とお伺いしたところ、ちょっと寂しそうに、そして、私には少しすまなそうに「息子は、盛岡ではなく、秋田で研修したいそうです」とおっしゃっていました。確かに、父親のいる病院では、お互いに、何かとやりにくいかもしれないと思いました。その頃、私は1人でも多く日赤病院の研修医を増やそうと奔走していましたので、出来れば来てくれればうれし

いなと思って、聞いたのでした。その時の阿部先生の顔は、しっかり父親の顔になっていて、「息子の意思是尊重したい」という優しい理解のある父親の顔でした。

阿部先生を見ると、いつもその後ろには、おだやかで愛情豊かなご両親の影や優しい奥様、聡明な子供達がかいまみえて幸せのオーラが見えるような気がしていました。

阿部先生、すこし人生が駆け足でやって来たかも知れませんが、私は、幸せな人生を過ごされてきたように思います。

非常に、残念ではありますが、このへんでペンのおきたいと思います。

阿部知博先生、安らかにお眠りください。

そして、一緒に楽しく仕事が出来たことに感謝しております。

本当にどうもありがとうございました。